
【イベント報告】

『ジル・ドゥルーズの哲学と芸術——ノヴァ・フィグラ』合評会後記

黒木秀房

拙著『ジル・ドゥルーズの哲学と芸術——ノヴァ・フィグラ』の合評会が、大阪大学檜垣研究室と DG-Lab の共催で、2021 年 3 月 27 日にオンラインにて開催された。コメンテーターをお引き受けくださり、拙著を丁寧に読みいただいた上、鋭い指摘をくださった合田正人氏、小林卓也氏、またこのようなたいへん貴重な機会をお与えくださった檜垣立哉氏、得能想平氏に改めて心より感謝申し上げたい。また、ポスターを作成してくださった佐原浩一郎氏をはじめ、DG-Lab のメンバー、ご質問いただいた方々、聴衆の皆様にもこの場を借りて厚くお礼申し上げる。執筆の機会をいただいたので、当日の議論をきわめて簡潔にはあるが振り返りつつ、語りきれなかったことについて記しておきたい。なお、本稿では、当日いただいたご質問のすべてのひとつひとつに答えることはできないことをあらかじめお断りしておく。もちろん、それはひとえに著者の力量不足によるものである。両氏をはじめ、みなさまからいただいたコメント・ご指摘は研究の糧とし、今後論文や発表の形でお応えできればと考えている。

合田氏からは、本書で中心的に取りあげた「フィギュール」の射程をドゥルーズの外へとさらに引き延ばすようなコメントをいただいた。ご指摘いただいたものの中でもとりわけ重要なものを大まかにではあるがまとめ直すとしたら、本書の議論におけるドイツ的なもの（とりわけハイデガーとの近接性と差異）や宗教的なもの（*charité* や東洋思想との関連性）の不在、またヒューム、リオタール、ベルクソンの『二元論』といったこれまでドゥルーズ研究においては比較的取りあげられてこなかった重要な参照項への目配りの希薄さを上げることができる。本書はドゥルーズの研究書であり、議論の枠組みはあくまでドゥルーズの立論に依拠しながら、芸術との関連性に絞ってフィギュールについて論じた。しかしながら、『哲学とは何か』における議論をはじめ、ドゥルーズのフィギュールはそれにとどまらぬものであり、たしかに芸術論以外の部分についてはまだ展開すべき点があっ

た。とはいえ、合田氏が本書で論じきれなかったフィギュールがはらむ広大な問題連関についてご指摘くださったおかげで、翻ってドゥルーズの芸術論が狭義の美学にとどまるものではないことを改めて理解することができた。

小林氏からは、各章毎に丁寧な読解に基づいた議論の構造を射貫く的確なご質問をいただいた。全体としてまとめると、哲学と芸術における真理、逃走と抵抗、「立てる (*stellen*)」という述語、作品の自律性などにかんして批判的な検討をくわえた結果、本書が一見すると前ドゥルーズ的なものに縮減している見えるのご指摘だと理解した。しかしながら、改めて振り返ると、そのように見えた大きな理由は、本書の書き方がドゥルーズ哲学の核心に一挙に到達するものというよりはむしろ、ドゥルーズの思考を遡求し、再構成するかたちになっていた点にあったように思う。本書で試みたのは、ドゥルーズ哲学をクリシェに還元し解説することではなく、ドゥルーズの思考をテキストとしての痕跡から辿り直すことであった。その結果、ドゥルーズ哲学を開く一方、とりわけ哲学的述語をめぐってはやや舌足らずになってしまった点も否めない。当日の議論でも確認したことだが、小林氏が改めてその重要性を強調されたドゥルーズ哲学における非人間主義について異論の余地はなく、本書で論じたのも創造の非人称的な次元であることを再確認することができた。

浅学非才の筆者が、両氏の広大な視野から放たれた本質的な問いの射程を、現時点であまねく捉えているとはいいがたいが、今後ひとつずつ吟味・検討していきたい。ところで、ここまで言及していない両氏に共通する指摘がある。それは、本書第三部についてであり、共同体の必要性や共同性を語るその筆致について厳しい批判があった。また、合評会全体の議論の主な対象もこの点にあったように思う。筆者はこれまで一貫して存在論と美学を通底する領域を主な研究対象としており、今後もドゥルーズ哲学を

芸術論の観点から掘り下げていくつもりだが、一方でドゥルーズ哲学のみならずフランス現代思想における共生にかんする理論やその意義についても強い関心をもっている。そこで、今後の研究の展望として、ドゥルーズの共同体論をめぐる現時点での見通しを示しておきたい。

★

フランス現代思想のステージにおいて共同体論を考える際に、まず名前が挙がるのはジャン＝リュック・ナンシーの『無為の共同体』(1983)であろう。バタイユの読解に基づきながら展開される共同体論がブランショを刺激し、『明かしえぬ共同体』(1983)に結実したことは夙に知られている。その後、これらの思想はジャック・デリダによって批判的に検討されるなど、この議論は今なお続いている。

このように、ナンシーらを皮切りに「ドゥルーズ以後」の哲学者によって検討されたとみなされる「共同性なき共同体」にかんする議論は、じつはドゥルーズの芸術論のうちにも見出すことができるのではないか。拙著第三部で得られた成果を思想史的な観点から見返してみると、このような問いを立てることができるように思う。この点を鋭く見抜き、ではゲルマニストたちとドゥルーズの「共同性なき共同体」論の差異についてはどのように考えるのか、というご質問を檜垣氏からいただいた。この本質的な問いは、自身の研究の今後の指針としたいが、ここではその差異について考えるための土台として、思想史的観点から「共同性なき共同体」論のゲルマニストたちとは異なるもう一つの系譜の可能性を指摘しておく(1)。

80年代以降の後期ドゥルーズにおいて共同体に関連する論点がそれまでも増して見られるようになった背景を考えるにあたって、70年代のドゥルーズが置かれた思想史的背景を思い起こしておく必要がある。

まずは、ドゥルーズの立ち位置を明確にするために、ひとつの対立軸としてヌーヴォー・フィロゾフたちとの関連について見ておこう。ヌーヴォー・フィロゾフとは、そのリーダー格であったベルナル＝アンリ・レヴィをはじめ、1970年代にテレビなどのメディアに華々しく登場した哲学者たちを指すが、ドゥルーズが「彼らの思想は無である」と一刀両断に批判したことはよく知られている(2)。哲学者(ドゥルーズは「哲学者」として認めないかもしれないが)をこれほどまでに明確に批判することは、ドゥルーズにおいてはきわめて例外的であるがゆえに、かえって興味深い。

じっさい、ドゥルーズは1988年の「マガジン・リテレル」誌のレーモン・ベルール、フランソワ・エヴァルドによるインタビューにおいて『アンチ・オイディプス』について振り返りながら次のように述べている。

ヌーヴォー・フィロゾフは、マルクスを告発するだけ告発しておきながら、資本についての新たな分析をおこなうことがまったくないため、彼らの著作では資本の存在が不思議なくらい稀薄になるばかりで、要するに彼らは、政治的にも倫理的にも深刻な結果をもたらしたスターリニズムの影響を告発し、その淵源にマルクスがいると仮定したにすぎないのです。ヌーヴォー・フィロゾフは、不道德な影響をおよぼしたとして、ことさらにフロイトを非難した人たちに近いといえるでしょう。そんな態度で哲学ができるはずはありません(3)。

そもそもヌーヴォー・フィロゾフとして認められる一群の哲学者たちは、フランスで1973年から発表されたソルジェニーツインの『収容所群島』を契機に転向した68年の元闘士たちである。彼らはマルクス主義のうちに論理的必然性をともなった帰着点としてのスターリン主義的全体主義を見出した。その彼らがドゥルーズ＝ガタリを直接的に批判したのだから、ドゥルーズは黙っていらなかったのだろう。だが、ドゥルーズによるヌーヴォー・フィロゾフへの批判は、1988年のインタビューで繰り返されていることからわかるように一過性のものではなく、また彼らがメディアを利用することに対するありがちな批判とも異なる。マルクス葬送派の向こうをはってドゥルーズが強調するのは、マルクス主義に対する批判ではなく、それに代わる理論が必要だということだ。

ところで、視野をドゥルーズの周囲へと広げてみると、状況はより複雑だったことが分かる。1977年、『人間の顔をした野蠻』を上梓したベルナル＝アンリ・レヴィに対し、バルトは手紙を送り、明確な支持を表明する一方、そのことを公にしないことを望んでいた。だが、レヴィはバルトを裏切り、手紙を『ヌーヴェル・リテレル』誌に掲載した。これを読んだドゥルーズは激怒し、バルトに弁明を求めた。バルトのレヴィに対する態度の両義性も興味深い。党派性を忌避したドゥルーズがその裏側でこうした態度を取ったことはきわめて異例の事態である(4)。ここではこれ以上の詮索を避けるが、1977年バルトがフォーコーの指名によりコレージュ・ド・フランスで行った「いかにしてともに生きるか」講義で問われていたのが共生の問題であり、その議論の出発点にドゥルーズの引用も見られる点もあわせて考える必要があるように思う。

つまり、レヴィに対する執拗な批判とバルトに友愛の記しを求めた事実が指し示していることは、たんなるマルクス主義をめぐるドゥルーズとレヴィの立場の違いというよりは、それまでのドゥルーズの共生に関する理論的限界と再出発点であるように思われる。重要なのは、レヴィによるドゥルーズ＝ガタリへの批判の妥当性ではなく、ドゥルーズ自身に『アンチ・オイディプス』までとは違つかたちで共生の問題に取り組む必要性があったということではないか。じっさい、それ以降のドゥルーズの著作には、それまでに見られなかった共同体に関連する概念がぎつぎつと現れる（「仮構作用」はまさにその代表的なものであろうし、1978年に発表された「スピノザと私たち」（強調は筆者）は示唆的である）。

もう一つ補助線を引くとすれば、それはフーコーとのあいだである。71年から73年、フーコーは、サルトルやドゥルーズも会議に参加したGIP（監獄情報グループ）で、監獄に収監された人々の言説を導き出す活動を行っていた。その理論的著作の形としての成果が『監獄の誕生』であるが、ドゥルーズはこの著作について以下のように語っていた。

しかし新左翼もまた、マルクス主義のあまりにも粗雑な断片を相変わらず保存し再編して、またもそこに埋もれてしまい、スターリニズムも含めた、古めかしい実践とよりをもどす集団の中心化をまるで再構築するようにしたのである。おそらく、一九七一年から七三年まで、G・I・P（監獄情報グループ）は、フーコーとドゥフェールの激励をうけて、監獄闘争と他の闘争とのあいだに独自の関係を保ちながら、このような再構築を避けることができるグループとして機能した。そして一九七五年に理論的著述に復帰して、フーコーはあの新しい権力の概念を先がけて作り出したと思われる。それは、私たちが見つけ出すことも、言表することもできないまま、探し求めていたものだった（5）。

ここに見られるのは、まさに新左翼とはまったく異なる理論と実践をフーコーに見出すドゥルーズである。ドゥルーズにとって、ヌーヴォー・フィロゾフは「無」だとしても、マルクス主義とは異なる理論の必要性があったことはこの箇所からもわかるが、その乗り越えとしてフーコーの「権力」概念を見出していたことは特筆に値するだろう。また、この概念の創出にあたって、「知識人

と権力」（1972年のフーコーとドゥルーズの対談）という理論的生産活動のみならず、哲学者がマイノリティの言説を知識人の言説に還元しない形で引き出す実践活動を行っていた点は、サヴァルタンからの批判に応えるためにも改めて強調しておきたい。

一方バルトは、1975年にフーコーからの指名を受け、コレージュ・ド・フランス講義の準備に入るが、「いかにして共に生きるか」講義において問題になっていたことも、フーコーの権力論に強い影響を受けたものであった（6）。そこで提示された「イデオリトミー」という概念は、身体を通過する偏在する力から守られるべき固有のリズムのことが、さらにバルトは、このリズムを守りながら、孤独に陥ることも集合体に還元されることもない、その中間に位置づけられるような共生のあり方を探っていたのだ。フーコーもまた、自身による自身の情動性をギリシア人に探り、それを芸術作品の生として見出していたことをドゥルーズが指摘した点は、拙著の中でも展開したことである。

以上のように、ヌーヴォー・フィロゾフを対蹠点として見たときに浮かびあがってくるのは、フーコーの権力論の影響下に、身体概念を刷新しながら、マルクス主義とは異なる仕方で、「共にあること」について、フーコー、バルト、ドゥルーズがそれぞれの考察を深めていたということだ。その点を踏まえて、今一度ドゥルーズに振り返ってみると、ガタリとの共著では「共同体」というテーマは前景化しないものの、家族のような既存の人間関係や国家のような社会体には還元されない特異な身体概念（「器官なき身体」や「リゾーム」）が現れていることに改めて気づかされる。まさにナンシーが『共同-体』（1992）で展開していたように、corps というフランス語がもつ意味範囲も踏まえるならば、直接的には共同体について論じることはないものの、ドゥルーズもやはり共同性なき共同体論をたしかに論じていたのであって、80年代以降に深化したと思われるこのテーマは、70年代ドゥルーズ＝ガタリのうちに胚胎していたと考えることができるのではない。

以上が、今後、ドゥルーズの「共同体」論を検討していく上で見通しである。ゲルマニストたちの共同体論との異同等については、こうした系譜とは別に詳細な研究が必要となるだろう。ご指摘いただいた点も合わせて、これらの研究の中で考えていきたい。

註

1. ドゥルーズの著作には「共同体」という語の使用の極端な少なさにもかかわらず、しかし共同体論に連なる重要な論点が見え隠れする。彼自身

が体系的に「共同体」を論じているわけではなく、この語の扱いには慎重を期さなければならないことは言うまでもないが、この語の使用や概念自体にかんする研究は別の機会に譲りたい。

2. Gilles Deleuze, *Deux régimes de fous : textes et entretiens 1975-1995*, édition préparée par David Lapoujade, Minuit, 2003, p 127. (ジル・ドゥルーズ『狂人の二つの体制 1975-1982』宇野邦一ほか訳、河出書房新社、192頁。)
3. Gilles Deleuze, *Pourparlers 1972-1990*, Minuit, 1990, p. 198. (ジル・ドゥルーズ『記号と事件』宮林寛訳、河出文庫、2007年、293頁。)
4. このいきさつについては次の論考を参照。Claude Coste, « Barthes et l'affaire des « Nouveaux philosophes » », *Littérature*, vol.186, no.2, 2017, pp. 10-19.
5. Gilles Deleuze, *Foucault*, Minuit, 1986, p. 32. (ジル・ドゥルーズ『フーコー』宇野邦一訳、河出文庫、2007年、51頁。)
6. 次の書評を参照。Jean-François Bert, « Roland Barthes, *Comment vivre ensemble*, cours et séminaire au collège de France (1976-1977) », *Le Portique* [En ligne], 10 | 2002, mis en ligne le 17 juin 2005, consulté le 30 mai 2021.